

明珠

龍泉院
參禅会会報

従容録に学ぶ (八)

第二〇則 地藏親切

〔示衆〕

衆に示して云く、入理の深談、三を嘲り四を擺き、長安の大道、七縦八横たり。忽然として口を開いて説破し、歩を挙げて踏著せば、便ち高く鉢囊を掛け拄杖を拗折すべし。且くいえ、誰れかこれその人。

〔本則〕

挙す、地藏、法眼に問う、上座何くにか往く。(人を羅織るして作麼かせん。) 眼云く、迤邐として行脚す。(草鞋錢を索め去く。) 蔵云く、行脚の事、作麼生。(果然として放不過たり。) 眼云く、知ら

ず。(何ぞ早く恁麼にいわざる。) 蔵云く、不知最も親切なり。(就身打劫。) 眼、豁然として大悟す。(險と盤纏を費さんとす。)

「地藏親切」というと、衆生済度のお地藏さんを連想しますが、この則はまるでちがいます。ここに出てくる地藏は、唐末の珪琛(八六七〜九二八)和尚のこと。福建省の地藏院と湖南省の羅漢院に住して禅風をふるったところから、禅門では地藏や羅漢の名で親しまれています。

系譜の上では、雪峰―玄沙―地藏とうけ、青原下に属します。そして、地藏のもとからは法眼宗の開祖、法眼文益が出ているため、地藏は重要な地位にある禅者です。『従容録』では、ほかに第一二則「地藏種田」の機縁がみられます。

さて、法眼は浙江省の生れで、南遊して福建省福州で修行し、すでに深い悟境に達していましたが、さらに西へ行脚しようとした時、暴風雨に遭って地藏院に宿した折の機縁がこの則です。



まず、万松の「示衆」は、真実の仏法の理は、ゴテゴテと説明する必要はなく、長安の都へ通じる大道のように、もともと縦横自在に通じている、だから、言葉や動作が道にかなえば、それこそ修行ができ上がった者なのだ、といったほどの意味です。ここは、以下二人の行脚問答を導くための序章、といつてよいでしょう。

つぎが「本則」です。地蔵が法眼に問うた。「お前さん、どこへ行くのかね。」「ただぶらぶらと行脚します。」「ほう、いったい行脚とは何だね。」「わかりません。」「わからんのが最も親切じゃわ。」これで法眼が悟った。

ただこれだけです、ここに深い仏法の道理がこめられています。眼目は行脚です。行脚は遊行ともいい、参師と聞法を目的として広く諸方の道場をたずね、正師を求めてめぐり歩くことです。仏教では伝統的な修行実践の方法とされ、五三人の善知識を求め歩いた善財童子の物語りは、法華経の所説としてよく知られていますね。

唐代以後の禅門では、とくに行脚が重んじられました。修行者たちは競って正師を求め、善知識をたずね、幾千里を行脚したのであります。正師と定めて道場にとどまり

長く修行しても、機縁かなわず安心の体験が得られなければ、ふたたび草鞋をはいて遍歴するのが常でした。あたかも行雲流水のように。禅の修行者を雲水というのは、これに由来します。

地蔵も法眼も例外ではなく、すでに長い行脚遍歴の体験を重ねていました。地蔵がズバリ「一体、行脚とは何かね」と行脚の本質を尋ねたのは、その経歴をふまえての誘導でした。万松はこれをコメントして、「果してつかまえたぞ」と喝采しています。法眼は正直に「まだよく体得していません」と答えました。

ところが、地蔵はこれを肯定した。「親切」とは親密切要、ギリギリという意味です。つまり、行脚の重大さは言語表現をこえているから、法眼の「不知」は単なる「知らず」ではなく、いわば知不知をこえた「不可知」と同義だと認めたのです。だから万松は、ここを「身ぐるみ奪ったぞ」と賞讃しています。

おのれの力量を恥じながら、「不知」といった法眼は、この地蔵の一語でハッと真理を得てきた。それは、大いなる心地の解明でありました。こうして正師に邂逅できた法眼は、地蔵の禅法を嗣いだ

母なる流れ、大黄河



のでした。

それにしても、行脚がこれほど大きなテーマになるのは、なぜでしょうか。それは、死を賭しているからです。むかしの行脚こそは、現代人にはおよそ想像もつかぬ難行苦行であったからです。

わたくしは、中国の禅寺や禅蹟を何度も訪れています。回を重ねるたびに、むかしの禅僧たちの「行脚」の意義の大きさを痛感します。日本では想像外の広漠たる大陸の山河です。禅僧たちが頻繁に往来したという江湖（江西・湖南）だけでも四四方方キロ、日

本全土よりもはるかに広い。それも、現代の交通機関を利用しての実感です。この広土を歩いて、山を越え大河や湖を渡った彼等は、一体どこに泊りどうして衣食をまかなったのか。病いやケガの時はどうしたのだろう。こう考えるだけでも、行脚の難行苦行は、伽藍の中で静かに座れる座禅の比ではないのですね。

禅の語録をみると、よく師家と学人が初対面の時の「どこから来たか」「―から」、別れの時の「どこへ行く」「―へ」という問答があります。わたくしは、この短い問答の重さを最近ひしひしと感じます。その根底には、修行者たちの必死の菩提心がこめられているのです。道元禅師の「師はあれども、われ参不得なるうらみあり。参せんとするに、師不得なるかなしみあり。」（行持上）のお言葉は、こうした雲水の真摯な道心を伝えるに充分ですね。

学道は、書物からの知識だけではダメです。時代や職業は変わっても、実践体験こそは真理体得の母であり、そのためには積極的に求める姿勢がなければなりません。禅に生きることは、所詮、生活万端のあり方いかんということになります。



清光

萩原先生描く 完成予定の文殊さま

聖僧文殊大士像

新添協賛のお願い

古来より禅寺においては、坐禅堂の中央に僧形の文殊大士像を聖僧さまとして安置し、道場守護と修行の無事円成を祈念しております。

しかし龍泉院の坐禅道場には、未だ尊像が安置されず、その代りに尊牌をお祀りしております。

このたび、龍泉院三世大心宏雄大和尚におかれては、明年の成道会を期して、左記の如く、文殊大士尊像を道場の本尊として新添なされたいとの旨を申されました。

時あたかも平成二年（一九九〇）は、当参禅会の発足より二〇周年の節目にも当たります。つきましては、参禅会有志が相企りこの浄業の一端を協賛させて頂きたく発願いたしました。

よって、諸佛諸天の御加護によりこの浄業が、魔事なく、円成されます様祈念すると共に、何卒、御賛同賜りたく、お願いする次第であります。

平成元年一月吉日

龍泉院参禅会有志代表

聖僧 僧形文殊大士木像 一体
 仏師 萩原 清光師
 完成予定 平成二年一月

協賛幹事 高間 利介
 八木下 真司
 同 加藤 健之

萩原清光先生の略歴

一九五〇年一月 東京浅草に生まれる。

一九七〇年 高村光雲門下の関根西雲師に、仏像彫刻を学ぶ。

一九七五年 東京芸術大学彫刻科卒業

一九七九年七月 浅草公会堂にて初個展

一九八五年四月 浅草公会堂にて個展

山梨県北巨摩群高根町村山西割 二一三三三に在住



いま、家族に 感謝しつつ

松戸市 平沢 満代

私が、龍泉院の参禅会にうかがうようになったのは、たしか八年前くらい前だったと思います。

富田様や、武山様に、お話を聞きましたのが縁でした。坐禅の後、『正法眼蔵』のお話を、解りやすく、ご住職様が聞かせて下さるとのことでした。今、家庭の中では、佛様とのかかわりが少くなり、先祖とのかかわりもうすれて行く中で、佛様に、少しでも多く接させて頂ければと思っております。月に一度でも、お寺さんへ



食前の五観の偈（成道会）

と出かけられるのは、家族が、みんな元気で、ころよく出してくれるからこそ、出かけられると思ひ、みんなの健康に、感謝しています。

毎回、坐禅の後、佛様のお話を楽しみに聞かせていただいています。初めのころのことですが、

「佛道をならうというは、自己をならうなり、自己をならうというは、自己を忘るるなり」、このお言葉は、今でも鮮明に思ひ出し、色々なことを、反省しています。

この頃は、色々な方々が大勢参加されるようになり、そのお一人、お一人の方々が、異ったお考えを話されるお茶の会は、私の栄養にさせていただいております。これからも、ご住職様始め皆様のお世話になりながら、定例坐禅に参加させて頂きますので、宜しくご指導下さいませ。

素直

我孫子市 清水 秀男

素直とは各人の清浄心がそのまま顕われている状態であろう。私の毎日は心が煩惱に覆われ、煩惱に囚われ惑わされ、善悪愛憎に引き回されているのが現実です。

「火の車作る大工は無けれども

自らが造りて己が乗りゆく」

この状態から脱皮する為には、徹底素直になることが必要だろうと思ひます。徹底素直な時はその人が、その人に成り切っている時であり、その人の本当の値打ちが顕われ、最も個性的になっているのではないのでしょうか。従って本当に自分でなければできない働きをしようと思えば、人間はまず素直になることが必用でしょう。素直になるということは、自分が空っぽになること。自分の心の重い荷物をおろしてしまふことでしょう。禅の修行とは捨てる修行であると云われています。捨てて空っぽに

第六回成道会円成

第五回成道会は、初雪の成道会となりましたが、第八回成道会は、小春日和の中で行われました。椎名老師と、三名の随喜僧のご指導により、当山参禅会員三七名の参加で、例年の如く厳粛に行われました。

御老師のご法話は、「願」についてでした。佛教では「願」を尊い徳目として教えており、「四弘誓願」は佛教の総願であること、沢木興道老師は、「願のない家庭

なれば、出会ったもの、出会ったものが新鮮で自分の中に満ち満ちてくる。又満ちてきたものに囚われず、その場限りで捨てていく。

そして坐禅とは徹底素直に成り切る事。そして本来の自分に回歸する事であろうと思ひます。

「花も美しい。月も美しい。

それを気づく心が美しい。」

以上駄文を弄しましたが、いつも椎名老師のお話を伺って私が学んでいる事、思っている事です。

「坐禅とは自分が自分の命に燃焼する道です。もともと燃焼していた命に気づく道です。」

（大乗寺 板橋興宗老師）

は、色気と食い気しかない、どんなに信心をし、佛教の本を読んでも願を持たない家庭はためである。」と説かれ、坐禅を生涯の願とされたとのお話は、参加者一同、魂をゆさぶられる思いでした。誓願を持つ人は、自ずと生き方が違う、「心願」を持つべしのお言葉に、新しい年に向けて、一人、一人が心に誓いを持って、散会いたしました。

【参加者】

木村誠治、宗藤幸生、安本正道
(以上僧職)

高間利介、小畑節朗、森岡俊雄、
寺田哲朗、宮田文子、武山喜代子、
平沢満代、神戸正、徳山浩、三町
勲、四ノ宮清二、高野千代子、
中嶋南州男、沢村国勝、青柳守英、

金崎史、小嶋進、小嶋喜子、染谷

はる、八木下真司、五十嵐嗣郎、
杉浦上太郎、下村忠男、武田博志、
原力三郎、石井勇、佐藤征志、
加藤健之、添田昌弘、佐藤勝男、
栗田章、清水利一、宮田哲男、
北岡やす江、佐藤初恵、井之輪進
服部純雄、(以上当山参禅会員)



第六回成道会 参加者一同 (S63.12.4)

第二の人生を迎えて

沼南町 宮田 哲男

新年早々、昭和天皇が崩御され、新しい平成の時代となりました。

奇しくも、私は昭和の初年に生まれ、六十余年の激動の昭和史と共に生きてきたことになりました。

戦場にこそ立たなかったけれど、広島で原爆に見舞われ、肉親を失いました。悲惨な戦争体験と、それに続く焦土からの立ち上り、それらは、私共にとっては、多感な青春時代のすべてでした。戦後の四四年も、いま振り返ってみると、あつという間に経ったような気がします。が又一面、体験した一コマ一コマを練っ行って、色々と波乱があつて、長かったような気がします。

今日の経済成長の基盤は、我々世代の人間が、遮二無二働いて築き上げたと言われますが、私自信は、そんな気負ったものでなく、仕事も張りがあつたし、生活も良くしたいという欲もあつてやってきたような気がします。そして、どうやら定年を迎えた頃、期せずして、昭和も終りを告げた訳です。これからは別会社の顧問ということで、公の仕事が切れたわけ

はありませんが、何れにしても、私にとって新しい人生のスタートには変わりありません。入学も就職も結婚も、およそ新しい門出には、輝かしい希望とみずみずしいものですが、人生のスタートは率直に言って、そんな心境ではありません。決して、意気消沈しているわけではありませんが、「門出」のイメージにそぐわない、異質なものを感ぜさせます。それはこの年齢になって、改めて何を生き甲斐として生きていくかという戸惑いのようなものがあるからです。

「人生とは何ぞや」という大テーマ、若いころ、真剣に悩んだその問題は、社会人となって世間の波にもまれていくうちに、何処かに片づいたと感じていましたが、どこい生きていたようです。やらないでしまひ込んでいた四十年前の宿題を突きつけられたような感じます。今迄徒らに、あくせく生きてきたのに、大切なことは、何一つわかっていないし、少しも成長していない自分を見せつけられた所から、私の第二の人生がスタートするようです。

丁度、この時に、参禅会に参加
するご縁をいただきました。と申
しまして、まだ日も浅く、足が
痛いのを我慢し、姿勢を正して、
坐っているのが精一杯といった所
です。別にご利益を期待している
わけではありませんが、何かしら
坐らないではおれないのです。
仕事しか知らなかったサラリー
マンは、それだけに生きること
に不器用な人間かも知れません。だ

木の周辺

心軽やかな時、『森の熊さん』
のメロデーが浮かびます。

昨年度、里に下りてきた熊は数
百頭に及んで、その何割かは殺さ
れました。例年に比べクヌギやク
リ、ミズナラの実が少なく、これ
を食用とする野生動物は山を下ら
ざるを得なかったのです。

古来、日本のためき、きつね、
鹿、兎や野鳥など童謡やお伽話に
登場する動物たちは、いつも人の
眼近にあり、共存してきたのに、
今や深山に分け入るか、反対に動
物園に出かけなくては姿を見られ
なくなりました。いいえ、高速道
や地方有料道路上では、結構たぬ
きや鳥の死骸を目にします。野

からこそ素直に、人生は修行の場
ととらえることが出来るような気
もします。

未熟でまことに、中途半端な私
の禅ですが、それなりに生活の一
部として、根づいてきたようです。
そして、これからの私の第二の人
生が、文字どおり、平成の境に至
るよう、一日、一日を大切にした
いと願っています。

柏市 武田 博志

生鳥獣と人との接触する度数は同
じとしても、内容は全く異なって
います。動物の個体数の減少にも
かわらず、人が開発の名の下に
山深くまで入りこみ動物の生息面
積を狭めていった結果といえます。

谷道、尾根筋を導かれるように
歩いてきた道は、山奥まで舗装さ
れ、人家も絶えた果に広大なゴル
フ場の網に行手を遮られるという
景色にあって変わりました。元も
と採算があうことで始められる開
発は、そうでないとわかれば、途
中でもすぐに放置されます。

ここ数年、世はグルメ・リゾー
ト・レジャーブームに湧いていま
す。海や川に無造作に捨てられる

釣針は魚や鳥を苦しめ、登山道脇
は空缶やビニール袋が小さな高山
植物を押しつぶして腐らず残って
います。細部にいたるまで商業主
義がはびこり、人は商品に踊らさ
れている印象をぬぐえません。消
費歓迎の風潮のなかでもあの石油
ショックは忘れられません。消費
を美德という人が物言えぬ弱者た
ち、樹木や小動物を種の保存範囲
といいつながら追いやり、一方で野
趣を求めるようです。

近年とみに地球汚染の報道がク
ローズアップされてきました。日



春を待つ落葉樹

本での出生率低下はまだしも、子
供たちに喘息や各種アレルギー反
応の増大は汚染との関連を取りざ
たされていますし、森林を枯らす
酸性雨、温暖化現象など、地球上
の生態系は人の都合から所々で寸
断され、機能を弱めつつあります。
すこし我欲を減らすことで、日
本には絶滅寸前の照葉樹林や生物
の臭い濃い明るい落葉樹林を残せ
ます。その中でこそ心の平安を得
食の美味なるを楽しめると信じま
す。木には製材としてつけられた
値札以上の価値があります。自然
を汚し壊す者は、遅かれ早かれ自
分にしっぺ返しをくくることを知ら
ねばなりません。

仏教は宇宙のダイナミズムの中
で生かされている自分に気づくこ
とを教えます。その生かしてくれ
ている世界が今、うめき苦しんで
います。私は自然の摂理にのっとっ
てこの世にあり、口づさむ歌をな
くしたくないのです。

昨年、一二月、赤城山にて思い
知らされたことを記しました。



撰心会に参加して

船橋市 加藤 健之

以前に書かせて頂いたことが有りますが、この参禅会で坐る前は書物禅ばかりでした。入門書で、何となくわかった様な気がしたり、現代語訳の正法眼蔵を読んで全く何のことやら理解出来なくなったりしたものです。又、臨済系の方の公案解釈の本は、坐禅未体験の理窟屋には割に親しみ易かったと言えますが、漸悟とか頓悟とか、さらには悟りの臭みも消せとかで、悟りへのこだわりが感じられました。同時に小生自身も、悟りが気になってしようが有りませんでした。

その様な時に酒井得元老師の著書『安心して惱め』にめぐり会えました。とても御親切に現成公案巻を説いて頂いて居ること、面白いエピソードを随所にちりばめて下さっていることがあいまって、何度も何度も読みました。その中で雑誌「大法輪」でお悟り特集を乗せており、それを読んだ酒井老師は師匠様である澤木興道老師と二人でお笑いになった事が書かれ



酒井老師や無著先生とともに

ております。まず坐らねばとふつ切れた思いが致しました。

「正師に会わずんば云々」は書物で知っておりましたが、未経験者にそんな器用な事が出来る訳もなく、自宅から通えるお寺様という事で坐らせて頂き始めました。仏縁というものは全く有難いもので椎名老師が酒井老師の教えを受けた方であることを教回通っているうちに知りましたし、何よりも初心の小生にぶつかって来る恐ろしいばかりの言葉からなる御提唱に心配事は霧散致しました。

例年の大撰心会のことは、それに参加された小畑さんから様子を聞かせて頂いておりました。いつかは参加したいものだと思いつながらも、一日一三炷も坐れるだろうかとか、結跏趺坐が出来ないようになって半年しか経っていないのに大丈夫か等の心配が先立って見送って来ました。ところがここにも仏縁が在りました。前記の本を小畑さんに貸した事があったのですが、その時に二三交わした会話で、小生が酒井老師をとて尊敬して居ることを覚えて居て下さいます、わざわざ自宅まで電話を頂き、今年は十回目であり酒井老師の提唱がある事を教えて頂きました。膝の心配も忘れて椎名老師に参加の

手続きをお願い致しました。

始めての体験に膝は小生の願いを聞き入れてくれず、何度かは半跏坐でしたし、その内の数度は脚を組み替える始末でしたが流れの中の綾模様とお許し願います。

「身心学道」の巻の御提唱は本当に得難く有難い聞法でした。どんな内容かを道って見ようとして説明する言葉もありません。決して勿体ぶっている訳ではありません。何か道ってもそれが余りに軽々しく響いてしまう様な気が致します。凡夫の「説似一物即不中」でしょうか。老師独特の言い回しの「全てのが心してる」ことを大切に頂きたいと思えます。又、宗門に於ける聞法の大切さを決して忘れてならぬ事も心し続けたいものです。『安心して惱め』を下山して読み返して見ますと、又違う佛法の景観を頂けました。坐る前、坐り始めて、大撰心会の聞法を経て、相が移る度に同じ書物が少しずつ違って読めます。

不染汚する気持は無いにしても、マンネリという毒で坐り始めの頃の新鮮な恐ろしさを欠き始めた小生にとっては、誠に有難い大撰心会でした。これからもひたすらに坐りたいと思えます。

「マイペンライ」

—東北タイに暮して—

松戸市 藤原 公

日タイ修交百周年のタイの紹介文章には、豊かで優雅な風景が書かれている。「大河チャオプラヤはタイの平野を北から南に流れる。物資を運び米を育てる。豊かな生活風景は船に乗り水の上から眺めるとよくわかる。洗濯、沐浴など

川による。魚が欲しい時には、釣糸をおろす。……」（朝日新聞）私はタイの事情もよく知ることなく、バンコクから約二百五十軒も離れた東北地方のナコンラチャシマ市のある研究所に籍をおき、タイシルクに関する調査研究に従



「イーサ」を見つめる親子

事した。

そこで見た農村はバンコク周辺の優雅な風景とは雲泥の違いであった。「水汲み容器の中を見て諦めた。その濁った水は沼の底から汲んで来たもので、飲み、ご飯を炊き、茶碗、鉢などすべてを洗う。鍋の中で湯気立っているご飯だつて、土を入れて炊いたように薄茶色になっていないか」（農村開発顧問末記より）。それは小説の誇張でなく、眼前の事実であった。田植された水田は地割れし、若稲は黄変して実るすべもない。タイの軍隊が作った農業用水池も五米ばかり下がった池底に白濁したわずかな水を残すのみである。その池底から天秤棒で水桶をかついだ主婦が肩の痛みをこらえながらのぼって来るのが見える。

一緒にこの地を訪れた農協プロジェクトの専門家の田中さんは、「水と農民との対話が欲しい」と言う。彼は離れた個々の農家を巡回指導している。彼はそれぞれの農家にそれぞれの技術を教えている。しかし農民の中には彼を振り向こうともしない人がいる。私が同伴したのは一日だけだったが、そのきびしさは私にも感じることがあった。彼は言う、「私には宗教心のかけらもない。しかし彼等

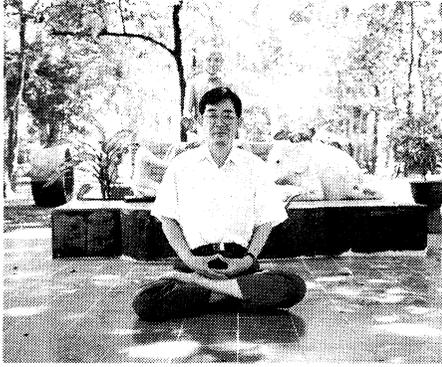
との対話のために彼等と同じ境遇に自分を措く必要を感じたので、彼等の村のお寺で佛門に入り、頭を丸めただけ」と。その時ほど自分が恥しく思ったことはない。彼こそ宗教心の無言の体現であり発心かも知れない。

一九八六年は東北タイでは異常な干ばつであり、八月以降翌年五月まで一滴の雨も降らなかった。この地方の生活及び農業は天水依存である。草木は黄化落葉し、炎天下の冬景色である。地は乾き地底から析出した塩で石灰でも撒きちらしたように地面の所々は真白である。その大昔、東北タイは海盆であったと言われ、その地下には厚さ百米にも及ぶ岩塩層があり、乾期になればそれが地表に現れる。それ故に地下水は飲料にはならない。この地には各国から研究者が集り種々な観点から東北タイの開発が続けられているがその効は小さく、軍隊による溜池作りが現実的な頼りである。

この地に生きる農民は口数が少ない。どんなに悪条件が来ようと黙々と鋤をとる。この国に「マイペンライ」（人を許す心づかい）という言葉がある。澤根さんは「この国の人々の鷹揚、洗練された物腰、微笑、諧謔、此事にこだ

わらないマイペンライ精神は川によつて育まれた。」(朝日新聞)と書いておられるが、この地で聞くその言葉には生きることのきびしさの響きがある。

乾季には多くの人達が佛門に入る。早朝の托鉢そして坐禅、無言の修行僧には無想に見える。否、そうでありたいと願っているのかも知れない。タイ人の殆どは佛像のペンダントを持ち、朝夕必ずお祈りを行う。佛教は彼等の生活そのものであり、佛教が彼等からはみでることもない。彼等の佛教は、彼等の地で彼等の生活の中で育まれたものであり、理屈でそれを理解すべきでないことだけを私は学んだ。



現地の精舎で坐る藤原さん

雲の行き来

近頃、会員の内で、地方あるいは海外に転勤される方も多く、又戻られて、参禅される方もおります。

昨年、代表の高間さん宛に、大阪勤務になられた黒田彰一さんから次のようなお便りがありました。高間さんのお手紙と共にご紹介いたします。

拝啓、朝夕秋冷を覚える季節になりました。

椎名老師様、高間様はじめ、龍泉院参禅会の皆様には、お元気のこと、拝察いたします。老師様からお送りいただいた御会報(四月八日付)に今あらためて目を通しますと、小生参禅の折をなつかしく思い出します。また現在、小生神戸で単身赴任の身、ときに湖北台に帰宅し沼南の森をみる度にも、同じ思いにひたります。機会をみつけ近いうちに、第四日曜日に参禅し、一二月四日の第六回成道会に参加させていただきたいものと希望しております。

その節には、一からの新米ですが宜敷く御指導の程願ひ上げます。

— 会員消息 —

日夜、社の営業活動に明け暮れる身、一度また心を静めるときを持ちたく考えています。

末筆ながら、参禅会の皆様に宜敷く御伝え下さい。

皆様の発展を祈り筆をおきます。

敬具

九月二日 黒田彰一

高間利介様

拝啓、めっきり秋らしくなりました。いつも御壮健で何よりと存じます。

さて同封の絵ハガキを黒田さんより頂きました。大方、参禅会が忘れられないようで有難いことでもあります。

そこで、『明珠』に出していただけなら幸いと存じます。御本人には、その旨を返事に書いておきました。

もう成道会も目睫に迫りました。では宜しく。 敬白

九月四日 高間利介
明珠編集者殿

なお約三年半、東北タイのナンコンラチャシマ市で、農水省「熱

帯農業センター」のタイ蚕糸研究所創設の代表者で行っておられた藤原公さんがこの程帰国され、「マイペンライ」の一文を寄せられました。

各行事のご案内

。大雄寺一泊参禅の集い

日時 六月一〇日(出)〜一一日(帰)
場所 黒羽山大雄寺(栃木県那須郡黒羽町)

交通 龍泉院よりバスで往復

。龍泉院大施餓鬼会

日時 八月一六日(水)午後一時
説教 中野東禅老師(予定)
法要 新盆・山門施餓鬼

。龍泉院第七回成道会

日時 一二月一〇日(日)午前九時
内容 坐禅・法要・法話・点心

以上、三つの行事を協賛いたします。会員の皆様にはふるってご参会下さいますよう、ご案内申し上げます。

龍泉院参禅会简介

- 一、日時 毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）
- 一、坐禅 止静鐘 三声 坐禅
経行鐘 二声 経行
放禅鐘 一声 放禅
- 一、講義 木版三通 開經偈を唱えて『正法眼蔵』の提唱を聞く
講師 龍泉院住職椎名宏雄老師
昭和六三年八月より「発菩提心」の巻を提唱中
- 一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談
正午解散
- 一、参加資格 年令、性別を問わず、どなたでも参加できます。
- 一、会費 無料
- 一、成道会坐禅
月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二日曜。（本年は二月一〇日）
积尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雑記

〔参禅会記録〕（ ）内は座談の司会者

昭和六三年

一〇月二三日 三〇名

（安本小太郎）

一月二七日 二七名

（沢村国勝）

第六回成道会 一二月四日 四〇名

成道会幹事 添田昌弘

清水利一

写真 中島南州男

二月二五日 二六名

（佐藤勝男）

平成元年

一月二日 二四名

（武田博志）

二月二六日 二五名

（杉浦上太郎）

千葉県曹洞宗青年会第十回大撰心会 三月一〇・一一・一二日

於 多古町 福泉寺

五名

三月二六日 二八名

（沢村国勝）

▼第六回成道会は、昭和六三年一二月四日、四〇名の参加を得て例年の如く盛界裏に円成いたしました。佛教の基本を理解する為にと、

龍泉院老師より水野弘元先生著『佛教』を賜り、さらに会員の平沢満代さんから本年も自製の「香袋」を頂きました。又多くの会員の皆様より祝賀をいただきました。こゝに厚くお礼申し上げます。

▼成田空港に近い香取郡多古町一畝田にある「福泉寺」において本年の千葉曹青主催、「大撰心会」に龍泉院より、小畑節朗、加藤健之、沢村国勝、高野千代子、武田博志以上五名が参加いたしました。今回は発足以来一〇年の節目にも当られるとの事で道俗三八名が三日間の如法坐禅に勤しましました。特に酒井得元老師を講師に『正法眼蔵』身心学道の巻のご提唱は、日課の坐禅と相俟って、加藤さんの一文にある通り、誠に得難く有難い勝縁でありました。

又、「福泉寺」は無着成恭老師が、四年前無任の寺を美事に整備されたお寺で、「知足」と大書された坐禅堂で三日間坐らせていただきました。無着老師には堂頭和尚としてお勤めの他、格別のご好情をいただきました。厚かましくも我等は昼食をご馳走になり、ご著書『俱会一処』を頂きました。心より有難くお礼申し上げます。

（節光記）